

巻/頭/言

生産技術が生む競争力—持続的革新とヒューマンキャピタルが支える—

Competitiveness Brought From Manufacturing Technology
—Role of Continuing Innovation and Valuable Human Capitals—豊田政男
Masao Toyoda

“夢はみるもの、いや叶(かな)えるもの”をモットーに、多くの技術者が自負を持って“ものづくり”を推し進めてきた。“夢か現実か”となると、科学は“夢”ともいわれるが、夢のない人に現実を理解させることは難しい。ものづくりは現実であるが、それは“夢”でもあり、“夢”の実現でもあるのだ。

我が国では“ものづくり帝国主義”ともいべき立場で、諸先輩が国力の向上に果たした役割は大きい。ものづくりが経済を支配するとの考えが、“Japan as No.1”をもたらしめたのかも知れない。一方で、科学至上主義では、科学の持つ普遍性と有用性を、相反するものとの考え、有用性を捨てるのが美学との思いが前面に出る。有用性が強調されて普遍的知識を忘れることの行き過ぎと、普遍性のみこだわって有用性を忘れることの行き過ぎの2つとも、一方向のみのむなしさを感じさせる。

今や世界が大きく変わってきている。“変わる”の議論となると、いつも“不易と流行”がいわれ、変わってはいけないものがある、特に技能などはその典型例としてあげられる場合が多いが、技術・技能が変わってはいけないことではない。変わってはいけないというものも、変わらなければ、恐らく持続的発展はないであろう。

政治、経済、文化などいろいろな面で“変わる”が見られ、特に、近年の我が国の国力の低下という変化は懸念される場所である。“薄れる日本企業の存在感”“世界シェアの著しい低下”などの文字が新聞紙上を賑(にぎ)わしているが、我が国の産業の強みはどこにいったのか。IT関連の苦戦、液晶パネルや白色LED(Light Emitting Diode)でさえシェアを落とす一方で、デジタルカメラ、NAND型フラッシュメモリのようにシェアを上げているものもある。この違いはどこにあるのか。シェアトップが変わる原因は、

機動性にあるという。その機動性を支えるのが、実は基盤技術力である。これまでの我が国の強みである戦略性と機動性を支える基盤技術に人が集まらないことは懸念材料である。材料技術、溶接技術、鋳造技術、塑性加工技術などものづくり基盤技術分野の研究者も流行に流れている。流行に流れるのは悪いことではないが、我が国はすべてが同じ方向に流れる傾向にあり、基盤の魅力を示せないことが大きな問題なのである。我が国では、1960～1970年代、とにかく産業技術力の向上を目指そうとする“熱き思い”が、多くの基盤技術を大きく発展させてきたことを忘れてはいけぬ。この基盤技術と“思い入れ”の人材が我が国のものづくりNo.1を支えたのである。

必要なことは、まず、①技術革新・進歩とヒューマンキャピタル(人的資本)：基盤技術の重要性を認識し、技術の戦略的な維持・発展を多面的に考えることと、基盤技術の魅力化で人材が集い、それが人財とならなければならない。次に、②研究開発マネジメントの高度化：基盤の強い人財が育ち、有機的・融合的に思考させることで、プロダクト・イノベーションにつなげなければならない。さらに、③産学連携のような外部人財を活用し、目指すものが明確で相互刺激が得られる高度に組織された共創の場の創設である。

今こそ、政府、産業界、そして学界には、産業技術力の更なる発展について継続的な努力が求められている。我が国の人々の行動原理はワールドカップのときの監督評を見ても分かるが、開始前には監督をあれだけたたいたサポーターやマスコミも、快進撃が続くと手のひらを返したように評価する。この変わり身の早さは利点でもあるが、科学・技術では必ずしも利とならない。今や、ものづくりの基盤技術において、“続く”の意味を考え直すときであろう。